

れたなかで実施され、そこから得られた資料を用いて作業を実施している。このため、「想像」を含む部分が多々ある。これらについては、今後実施される発掘調査を待つて、再度検討していきたい。

2. 平安末期以降の国分二寺

平安末期以降の国分寺のありかたについては、1030（長元三）年頃の不与解由状の草案である、『上野国交替実録帳』（以下、実録帳と略す。）が著名である。実録帳には、11世紀前半の国分二寺の様子が見てとれ、金堂や塔は姿を保っているが、僧坊や南大門等の諸門や築垣は「無実」と記される。さらに、大衆院や倉庫施設も破損した様子が見て取れる。発掘調査では、伽藍地南辺の築垣基部と重複して竪穴住居跡が確認された。その埋土上層に As—B が認められ、出土遺物から11世紀前半に位置付けられる。このことから、実録帳に記される築垣無実の状況が考古学的にも裏付けられている⁽¹⁾。僧寺の発掘調査を担当した前沢氏は、11世紀前半期の状況について以下の3点を推定している⁽²⁾。

「（前略……①築垣は11世紀初期には既に全壊しており、その上に竪穴住居跡が造られる状況となっていた。こうした様相は、僧寺・尼寺中間地域遺跡で見つかったこの時期の竪穴住居跡から、多量の国分寺瓦と、塔の化粧基壇と同質の石材が出土しており、外部からの出入りと資材の持ち出しが容易であったとみられることから裏付けられる。②竪穴住居跡覆土の上部に As—B 層堆積が認められることから、この後も築垣は再建されなかったものと判断できる。③この時期の竪穴式住居があるのは、寺域の南外側と築垣の近辺に限られており、塔や金堂などがある中央部では見つかっていない。周縁部は壊滅状態になっているのに対し、中央部はある程度姿が保たれていたが、次第に荒廃が進んでいたと見られる。これは、「上野国交替実録帳」に記載されている様相と矛盾しない。……（後略）」

一方、尼寺については、昭和40年代の発掘調査を検討した大江氏が、出土瓦類のありかたから9世紀末まで創建当初の瓦葺きの中門が存在し、9世紀末以降に非瓦葺きの後出する中門の建立を想定する。また、金堂跡出土の瓦類からも9世紀末にまでは保守されていたと考えている⁽³⁾。昭和52年の調査地「隣接地域」では、10世紀後半～11世紀に設定（報告書で提示された出土遺物による。）される竪穴住居跡が8軒認められる。しかし、現段階では尼寺に関連する遺構との関係が判然としていないため、10世紀後半～11世紀のあり方はわからない。

地質面からは、金堂跡基壇（S3トレンチ）の「南溝」の埋土上位に As—B の堆積が認められる。これに対して基壇上面には同層の堆積が認められないため、As—B 降下期に建物の存在を考えることも可能であるが、基壇面のレベルが、周囲（南溝など）のレベルより上位にあり、後世の耕作で As—B の純堆積層が鋤き込まれたことも否めない（S1トレンチも同様）。

次に、平安期の自然災害をみていくと、前述したが12世紀初頭の As—B の降下を挙げることができる。この層は前橋市や群馬町の発掘調査で、状況の良い場所では20cmの厚さで確認され、降下時の厚さはその倍程度あったと考えられている。その様子については、『中右記』天仁元年九月五日条に記されており、「上野国府の庭にも熱い灰が積もった。」とある。僧寺や尼寺の発掘調査において As—B の純堆積層が認められる部分があり、降下以降に人為的な掘削が及んでいないことを示している。また、『類聚国史』一七一災異五地震弘仁九年七月是月条には、関東地方であった大地震に関連する記事がみられ、上野国を中心に被害があったと考えられている。

近年の発掘調査では、この地震による地割れや墳砂が認められる。群馬町井出明光寺遺跡では、幅20m・延長100mの範囲で大きな地割れ及び墳砂を確認し、最大で50cmの落差を測る。出土遺物及び地層観察から、この地震が起因していると推定している（未報告）。この地震に関連する国分二寺のあり方については、飯島義雄氏が僧寺伽藍地南辺の地層観察から、818年の大地震の痕跡が発掘調査結果から読み取れると想定している⁽⁴⁾。史料にはこの地震に関するものは認められないが、寺の建築物にも影響があったことも考えている⁽⁵⁾。

尼寺の調査では、講堂や中門については再建も想定され、検出した遺構や堆積地層の再検討や、出土瓦類の各期の比率などを検討する必要があるだろう。

中世前期は、IV章で記したが、蒙古来襲に対する「異国降伏」の祈禱宣旨がある。1292（正応5）年は弘安の役から11年目にあたり、文書の宛所は北条貞時で、奉じた人物は連署の大仏宣時である。当時上野国は得宗守護国であり、一宮・国分寺をはじめとした上野国内の寺社で祈禱が行われたのであろう。同様な文書は、延慶3（1310）年にもみられる。このことから、建築物のあり方は全くわからないが、13世紀末～14世紀前半段階で「国分寺」の存在が示されている。また、沼田市三光院にある木造十一面観音立像の首部胎内銘には、文永7（1270）年の製作と記される。作風から快慶一派の仏師による作と考えられている。本像は、応永13（1406）沼田景朝が、群馬郡国府地方にいた村上出羽守を攻め落とし、その折の戦利品として上野国分寺辺に安置されていたものを持ち帰ったものと伝承されている。しかし、村上氏が国府周辺に存在した史料等はなく、この伝承も定かではない。

中世後期は、僧寺・尼寺及び中間地域の発掘調査で認められた遺構・遺物にみるものが可能である。僧寺の調査では、室町中期に比定される鰐口や六器が出土していることから、近隣地に何らかの建物の存在が想定できよう。また、金堂では14世紀後半～16世紀にかけての石造物（五輪塔、宝篋印塔など）が出土している。また、このほか、溝跡・土坑や井戸跡が出土し、同時期の陶磁器類なども発見されている。僧寺の伽藍地内については、特に東側が水の影響をうけるエリアであり、その影響を受けない寺の基壇上が墓域化されたのであろう。このため、14世紀後半期において国分寺の中心施設ともいえる金堂が墓地となったことに対し、国分寺機能の喪失と考えられる⁽⁶⁾。これに対し、追塩千尋氏は、「葬送に関与し始める国分寺機能の現れ」という解釈も想定されると考える⁽⁷⁾。これに関しては、中間地域で確認された「小見廃寺」、妙見寺や大蔵坊など周辺にある宗教施設を含めて考える必要があるだろう。なお、墓地の造営は、17世紀代の天目茶碗や鉄釉折縁皿が出土していることから、江戸時代まで断続的に行われたと考えられる。このほか、江戸期の史料としてIV章に記さなかったが、文化～文政年間に回国修行をした山伏の道中日記である、『日本九峰修行日記』がある。群馬県地方の記述は、文化13（1816）年にある。以下部分抜粋する。「（前略）……文化十三年四月二十五日、八幡宮参詣。アシカ村泊。二十六日、上州国分寺参詣。……（後略）」ここにある、八幡宮とは高崎市八幡町に現存する八幡宮と考えられる。また、アシカ村は、群馬町の足門（アシカド）村と、考えられている。山伏は、この後托鉢しながら群馬町の金古に滞在している。ここでの、「上州国分寺」も第四章で記した理由により、現在の常安寺の可能性を考えておきたい。

註1 前沢和之（1986）「衰退期を示す竪穴住居跡—史跡上野国分寺跡—」『季刊考古学』第15号 雄山閣

2 前沢和之（1999）「第8章 国分寺と尼寺の発掘調査」『群馬町誌』資料編1 群馬町誌編集委員会

3 大江正行（1993）『上野国分尼寺・上野国分尼中間地域』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

4 飯島義雄（1995）「上野国分寺における地震被害跡の認識とその歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第17号 群馬県立歴史博物館

5 松田猛（1993）「平安時代初期の地震—『類聚国史』弘仁九年の記事を中心に—」『群馬県史研究』34群馬県史編さん委員会
このなかで、氏は「（前略）……記載はないものの上野国分寺などの寺院の堂塔や国衙・郡衙の舎屋などにも倒壊等の被害があった可能性も考えられる。例えば、山王廃寺と上植木廃寺の塔は9世紀頃に修造が加えられたとみられており、その原因の一つとして本資料の弘仁九年の地震によって被害を受けたと推測……（後略）」とする。尼寺の、講堂及び中門は調査範囲の限界性を含みながらも再建が想定され、自然災害との関連を考慮する必要もあろう。

6 2に同じ。

7 追塩千尋（1996）『国分寺の中世の展開』吉川弘文館

（参考文献）

群馬県前橋測候所（1930）調第七十七號『昭和六年九月廿一日北関東地震報告』

上田篤編（1996）『五重塔はなぜ倒れないか』新潮選書 新潮社